

第26号

(2014年4月1日発行)

発行:中央大学学会 出版白門会

CONTENTS

(お名前は敬称略)

- ▽松村美香氏を招き、2014年新年会開催
- ▽出版白門会の関連行事予定
- ▽出版白門会へようこそ
- ▽松村美香氏 新春講演会「臨場感を伝え、真理を追究する」
- ▽出版白門会「能楽鑑賞会」に参加して
…金田 徹
- ▽出版白門会主催 第3回電子書籍セミナーを開催
- ▽恒例の名湯巡り。伊香保温泉で会員が懇親
- ▽喝!箱根駅伝で中大はなぜ勝てないのか?
…加藤 守
- ▽出版界・白門同窓の輪
- ▽告知板
- ▽編集後記

出版白門会の関連行事予定

- ①地図を通して知る東京(谷根千・街歩き)
5月17日(土)
※詳細が決まり次第、会員メールでご案内します。
- ②第15回定期総会と懇親会
7月24日(木) 18時30分～
会場:日本出版クラブ会館、会費:6,000円
※後日、出欠確認を兼ねたご案内をお送りします。
- ③会報発行 10月1日予定
- ④箱根駅伝予選会応援
10月18日(土)予定
※詳細が決まり次第、次回会報でご案内いたします。
- ⑤第14回能楽鑑賞会
11月8日(土)/12時開場、13時開演
会場:国立能楽堂(渋谷区千駄ヶ谷4-18-1)/JR千駄ヶ谷駅より徒歩5分
演楽曲:「安達原(あだちがはら)/白頭・急進之出」・演者「観世 清可寿(観世流)」
狂言:「伯母ヶ酒(おばかさけ)」・演者「小笠原 匡(和泉流)」
解説:馬場あき子(歌人)
入場料:2,500円(会員・同伴者特別料金)
※「申し込み方法」「内容詳細」は次回会報に同封する、申し込みチラシをご覧ください。
- ⑥名湯めぐりの会
11月15日(土)～16日(日)
会場:万座温泉(日進館)
※詳細が決まり次第、次回会報でご案内いたします。

■行事に係わるお問合せは、下記メールでご連絡ください。
E-mail:pub.hakumon@gmail.com

出版白門

<http://pub-hakumon.jimdo.com/>

● 出版界に出版白門の知恵と情熱を! ●

松村美香氏を招き、2014年新年会開催

1月24日、東京・新宿区の日本出版クラブ会館において新年会を開催し、35名が出席した。第一部は作家の松村美香氏を講師に迎え「臨場感を伝え、真理を追究する」と題した講演会。14年目にして初めての女性講師であった。作家にして、国際開発コンサルタントでもあるという経歴の持ち主だけに、海外での調査活動の話から、第1回城山三郎経済小説大賞受賞に至るまでの「ニッチ戦略」など、非常に興味深い話の連続で、会員も熱心に聞き入っていた。また会場では、受賞作、最新刊などの販売、即席サイン会も

行われ、すべて完売する程の盛況であった。

第二部の懇親会は浜田会長の開会挨拶に続き、風間副会長の乾杯でスタートした。初参加者紹介コーナーでは、筑紫和男氏(建帛社)、橘川徳生氏(ウインダム)が登壇し挨拶を行い、会場から大きな拍手が送られた。恒例の新春ビンゴ大会では、初参加の橘川氏が1等となり、会場は大いに盛り上がった。そして吉例の土屋事業委員長のアカペラ指導による校歌の大合唱、最後に鹿谷理事の中締めで名残を残しつつお開きとなった。



出版白門会へようこそ

(アイウエオ順)

橘川 徳生 ウインダム 1987年 経済学部卒

橘川と申します。都内の小さな広告代理店ウインダムに勤務しております。

PR業務を通じて雑誌の編集者とは記事の掲載のご協力などで仕事での関わりが多少はありますが、書籍の出版の方とはあまり関わりはありませんでした。中大の方と一緒にできるとやはり連帯感を感じ、会話が弾んで楽しいです。今回お声掛けいただき、入会することになり、皆様といろいろなつながりを持っていければと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



筑紫 和男 建帛社 2000年 理工学部卒

本年の新年会より入会させていただきました(株)建帛社の筑紫和男と申します。2000年(平成12年)理工学部卒業です。弊社は食品・栄養、保育など家政学系の大学教科書・専門書をメインで扱っております出版社でございます。新年会は緊張のなか初参加でしたが、皆様とても暖かいムードで楽しいひと時となりました。まだまだ若輩でございますので、学友という繋がりを大切に、諸大先輩方からいろいろと勉強させていただければ幸いです。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



ホームページがリニューアルされました <http://pub-hakumon.jimdo.com/>

facebook 出版白門会サイトへのアクセスは検索サイトの「出版白門会(中央大学学会職域支部)」から…

恒例の新春講演会、今年は講師に松村美香氏をお迎えした。出版白門会13回目の新年会にして初めての女性講師だった。同氏は現在でも作家と開発コンサルタントの仕事を兼務していることもあり、講演内容も両方に係わるものとなった。

松村氏と海外との繋がりは、西新宿にあった総勢200人程の留学生寮「国際学友会」で住み込みのボランティアをしていた大学二年の時、どうしたらタダで海外に行けるかと考えていた時に、寮にいた友人に「青年海外協力隊」を紹介されたことに始まる。卒業後タイに行き2年間日本語の教師の研修をし、帰ってくると開発コンサルタントに転職した。それまでのボランティアベースではできない事がたくさんあり、専門家になりたかったからだという。当時はODA（政府開発援助）という言葉さえ一般的に知られていなかった時代。ODAは1950年代～1980年代まで戦後賠償で始まっているが、主流はエンジニアで道路、橋、農業支援の灌漑施設整備、水力開発（ダム）といったことをやる技術系の人が多いマッチョな男社会だった。その後、欧米系の思考回路のコンサルタント世代となって行くが、技術もない、英語もあまりできない松村氏は自分の立ち位置に悩んだ結果、筑波大学の大学院に進みMBAを取得する。ODA業界にはMBAの取得者はほとんどいないが、ODAにはMBA的発想が必要で、「開発事業は採算が取れないと持続性はない」「社会インフラにも管理コストがかかり、利益のない事業に人は集まらない」と松村氏は考えている。

「貧困には施しより、自立促進ではないか」「（緊急援助は必要だが）援助ばかりやっているとも思っている。自立をどう促していくかが松村氏のテーマでもあった。

～参加したプロジェクトの数々を一覧表で解説。また、日本語教師をしていた協力隊時代、新人としてのデビュー戦だった、モンゴル時代の写真を交えての解説がある～

当時は地雷が埋まっているような危険な



自著にサインをする松村氏

地区にも行き、軍の施設に泊まったりもした。コンサルタントというより、改善案の提案やアドバイスをしながら、皆と一緒に仕事をやっていることが楽しくてしょうがなかったという。

この頃、インドネシアのジョクジャカルタで仕事をしている時に、チームメンバーの秘書やアシスタントの人たちが話してくれたことが後に『ロロ・ジョングランの歌声』という小説になったとのこと。

～この後、学んだ経営学的手法を使った仕事の実例と内容が、統計解析の図表等を交えながら説明される～

（海外の）現場は大変なことも沢山あるが、やりがいもあり、その大変なことがクセになる。ただ、40歳を過ぎてくると日本に帰った時に「日本はこんな国だったかな」と思うようになったという。日本のODAも力がなくなり、後輩を育てるだけではなく、日本でもなにかできることがないかと考えるようになった。ODAという日本のマスコミでは粗探しが多く、良いことを伝えるツールがない。だれも書いていないなら自分が書こうかと考えるようになった。書く時に障害になるのが守秘義務の壁。ブログでちょっと触れたことさえ、注意された経験が松村氏にはあった。論文で発表するチャンスもない。クライアントは「意見を述べず事実関係だけを報告せよ」と言う。日本の国益を語ることも封じられているという状況の中で、小説なら守秘義務をクリアできるのではないかと。開発コンサルタントとしてもニッチなところで勝負してきたが、またニッチなところで勝負しようと松村氏は考えた。

勤めも常勤から契約社員に変え、小説を書き始めた。その第一作は光文社のミステリー大賞の最終選考まで残ったが落選した。選評の方々の意見を参考にし、次の小説は主人公をマスコミの人たちも親しみがある編集記者にしたり、相手役を日本人にしたり（第一作は外国人）して書き上げた。その『ロロ・ジョングランの歌声』がダイヤモンド社の「城山三郎経済小説大賞」を受賞した。

「ロロ・ジョングラン」という世界遺産にもなっているインドネシアの寺院の横を車で通った時のアシスタントとの話がモチーフになったという。次の小説は、賞を取ったこともあり少し好きな事を書こうと思ひ、松村氏はかなり自分の世界に没頭してしまった。その結果、自分の世界が理解されないほどニッチであり、アウェイの戦いであることを思い知らされ、意思疎通の難しさを非常に感じた。「開発コンサルタ

ントが地域開発をしている時に、経済環境省がその地域開発の側に銅鉱床を開発して、できるだけそこにアクセスしようと目論むのだが、実は同省が欲しかった



講演中の松村美香氏

のはウラン鉱山だった」という粗筋だった。編集者からは「銅がウランだったというだけの話でしょう」と言われ、仕方がないので自費出版でもしようかなと考えていたところ、東日本大震災で原発事故が起こり、モンゴルのウラン問題、核燃料廃棄物処理などの問題が明るみに出てくる。高杉良氏に「もったいないから何とか出しなさい」と励まされ、出版社を回って苦手の個人営業をした結果、角川書店より出版することができた。

その経験を通じて、アウェイで闘ってばかりではしょうがないと、だんだん思い始めていた時に中公から執筆依頼があった。システムエンジニアが盗難にあったり、病気になったりしながらアフリカ、エチオピア、ケニア、ロンドン、ザンビアへと移動しながらプロジェクトを立ち上げる話だが、見方によってはこんなにうまくいくはずがないという感じだが、明るくもなく、へこたれる事が山ほどある実際のアフリカを陰気に書いてしまったり、主人公があまり変な病気で倒れると、だれも本当にアフリカに行きたくなるのではないかと松村氏は考えた。罹る病気はエボラ出血熱や黄熱病ではなく、無難(?)な破傷風にした。

小説家としての松村氏の今後の活動の教訓は、マスコミに慣れることだという。開発コンサルタントとしての誇りはもちろん持っているが、折角本を出してくれる人がいる限り、そんな言い訳をしてはいけないと最近日増しに思っている。ニッチ作戦もそろそろ改め、いつか映像化できる作品を書きたいとも思っているとのこと心境を語る。

自分の強みは、現場の人たちと一緒に暮らし、楽しいことも、悔しいことも、悲しいことも共有してきた経験であり、旅行では経験できず、グラフや統計では伝わらない臨場感を小説という手法を使って伝えられるようになりたいと松村氏は言う。ジャーナリストと違って真実を訴えることが出来ないが、真理を表現し、追究していくことが可能と思われる小説をこれからも書き続けていこうと思っているとの決意表明で講演は終了した。

出版白門会「能楽鑑賞会」に参加して

金田 徹

今回、初めて参加させていただきました。「能」「狂言」鑑賞はもちろん、国立能楽堂へ入ることも初めてで、初めて尽くしでした。中正面の正面寄りで舞台がよく見えました。当日は「普及公演」だったため開演にあたり「リンボウ先生」こと林望氏の解説を聞くことができ「瘦松（狂言）」と「曾我兄弟（能）」を十分楽しめました。座席の前に字幕が映し出され、それを見ながら舞台を見ていましたが「曾我兄弟」の前半部分で何度か睡魔に襲われましたが、野村万

蔵らの狂言方のユーモアある演技ですっかり目覚め、最後の「めでたけれ」まで無事鑑賞することが出来ました。「能」って能面をして演技するものとばかり思っていたが、今回はお面がなかったことにビックリしました。

今まで「歌舞伎」「落語」「文楽」といった日本の古典芸能を見聞きしたことはありますが、今回は「能」「狂言」を体験して、改めて「和」の素晴らしさを感じました。

終了後、参加された皆さんと能楽堂のレ

ストランで感想を語り合いながら飲むお酒は最高に美味でした。（その後の、京王プラザホテルの展望ラウンジからの夜景も最高でしたが…。）会員の皆様、是非一度ご覧になってください。人として人生観や人間の幅が変わると思いますよ。白石様をはじめ、幹事の皆さまお世話になりました。



出版白門会主催 第3回電子書籍セミナーを開催

2月5日、講師に文化通信社の星野渉編集長をお迎えして、中央大学記念館において「立ち上がりつつある市場と出版社などの取り組み」というテーマで、第3回電子書籍セミナーを開催した。

電子書籍元年といわれる2010年から現在までの電子書籍の歴史と、黎明期を迎え、だんだん仕事になってきている昨今の市場状況の概観から話ははじまり、電子書籍専用端末の普及が最初にあったアメリカと、スマートフォンやタブレットが先に普及していった日本との違いに解説が進む。また、日本ではガラ携からスマホへの変化で電子書籍市場構造が一層変わっているとの状況が報告される。

日本の電子書籍市場で初期の頃より大きなウェイトを占めてきたのは、携帯コミックや、BL、TLなどのアダルトコンテンツだが、本セミナーにおいては、特に日本出版界の強力なコンテンツであるコミックは、紙においても電子においても市場を語る上で、重要なキーワードとして位置づけられ、解説された。そのなかで、雑誌が売れない、書籍は儲からないといった出版産業の現状で、マンガに寄り添ってきた日本の取次、書店にとって、今後さらに拡大するのは間違いのないマンガマーケットの電子化は大き

な懸念材料であると語った。

日本の電子出版市場を俯瞰する上で気になる、①電子書籍の発行点数②発行する理由・しない理由③価格の設定④利益率⑤売上率⑥電子書籍の発売時期⑦印税関係、等についても、文化通信社で実施したアンケートをもとに、逐一解説があった。

アマゾンの電子書籍売上ランキングから見た特徴的な事例についても解説が及び、その中で特にパブリックドメインの本が上位に出ていることに注目。ラインナップの相当部分がパブリックドメインである文庫のビジネスモデルに影響が出、出版社にとって今後はパブリックドメインになる意味が以前と全く変わってくると観測する。アマゾンの年間電子書籍売上出版社ランキングからは、これまで聞いたこともない出版社が上位にあり、その内の何社かは著者自身が直接自著の電子版を発行するための会社と思われる指摘。コミックを出していた既存の会社とは違う会社が電子版を発行したり、ゴマブックスのようにパブリックドメインの商品を中心に、電子書籍しか出していない出版社があったりすることにも注目した。電子書籍のマーケティングについては、電子ゆえの紙と違ったプロモーションの難しさ、ロングテールが全く無いとい



講演中の文化通信・星野編集長

う問題などに触れ、アメリカの電子書籍プロモーション会社「オープンロード」の話や、アマゾンのマーケティング戦略、紙との同時発売を目指す営業戦略の実際などが紹介された。

最後に、電子メディアの発達により、雑誌メディアが大幅に縮小し、そのことが出版産業へ大きな影響を与え、取次の再編や書店のビジネスモデルの変化になってきている現状を解説。「三位一体」と言われてきた出版界だが、いまや「三者三様」、それぞれが、これから自分達が何を創り出すか考え、生き残り策を追求していく時期になったとの見解で、セミナーを終了した。

（※2時間にわたるご講演は多岐に亘る詳細な内容でした。本欄では紙面の都合で、そのごく一部しかご紹介できませんが、ご了解ください）

恒例の名湯巡り。伊香保温泉で会員が懇親

第8回となる、出版白門会恒例の名湯巡り。今回は10月19日（土）～20日（日）に、伊香保の岸権旅館で実施した。

出発当日は箱根駅伝の予選会が立川で行われる日で、参加者一同その結果を気にしながらの新宿集合だったが、幸いなことに高速バス乗車直前に中が箱根駅伝予選通過との一報が入る。「これで、来年も1月3日に、箱根駅伝を応援できる」と喜び合い、バスの中に入ると早速ビールで祝杯を挙げ、

心置きなく一路伊香保温泉に向かう。

石段を登って岸権旅館に到着すると、夕食前に紅葉散策。その後、源泉の温泉を堪能する。充実した夕食をたしなみながら、倶楽部、クラブについて真面目に語り合う。食後、外出した居酒屋にはコタツがあり、コタツ談義で盛り上がる。その結果、異論もなく、めでたく「コタツ倶楽部」が結成される。

翌日は大雨。初志貫徹でゴルフをするグ

ループ（藤原、阿部、矢下）と、徳富蘆花記念文学館、竹久夢二伊香保記念館グループ（朝妻、土屋）、上田方面に俳句吟行に向かう人（白石）の3つに分かれた。ゴルフグループは生憎の雨中でのプレイになってしまったが、それぞれが、それなりに旅を満喫したことには変わりなかった。

（事業委員会・土屋）

喝！箱根駅伝で中大はなぜ勝てないのか？

加藤 守 (スポーツアナリスト/日本オリンピック・アカデミー研究委員、元トドシンク検査員)



流石毎日新聞におられた丹田さん、面白いテーマなのでお引き受けした。

箱根駅伝の記事は大体が順位・今回はシード権落ちなどと感傷的な観戦記で中身が薄くまた大学のためにもならない。

中大がどうして弱くなったのか？大学側の対応を見れば結果は当然で

あり、これからも勝てない(優勝)ことははっきりしている。何故、その点に少し触れてみたい。

15位でゴールした後の足立理事長・福原学長の言葉は「来年は何とかシード権を、または非応援を宜しく」というような全く内容のない話だ。挙句の果ては、浦田監督に「全ては私の責任」と言

わせる始末。一体大学は箱根駅伝をどう考え、何を期待しているのか？これでは選手・監督が余りにも可哀そうだ。あるOB曰く、中大はスポーツなどどうでもよい。頭で勝てばいいなどと訳の判らないことを言う。

今の時代スポーツは学際的にも占める位置は大きく、しかもワールドワイドであります。頭脳なくしては勝てない。また世界へも羽ばたけない。

箱根駅伝上位各校のスポーツに対する考え方は多様である。紙面の関係で今回は医・科学サポートの一つ、マンパワーについて取上げてみる。

早大は人間科学部そしてスポーツ科学部を立ち上げ、内科坂本(順大)、整形外科鳥居(東芝林間病院)・福林(東大)、運動生理岡田(日本体育協会)・福永(東大)、栄養鈴木(筑波大)・樋口(国立栄養・健康研究所)教授ら、日体大は運動生理浅見、整形外科中嶋(東大)教授らを招き医・科学サポー

トシステムを整えている。駒大は日本で初めてドイト・マインツ大に留学・研究をしてきた森本葵(東京オリンピック選手・元日本記録保持者・中大OB)を教授に迎え、あの大八木監督を育て現在をつくりあげている。東洋大・明大もしかりである。

中大が強かった頃、よく日本体育協会スポーツ科学研究所(現在国立スポーツ医・科学センターへ移行)で体力測定を行い、データの解析を受けていたのを、私も当時研究所にいたので覚えている。敢えていうなら、今や高校でも高地トレーニングなどを行っている。

箱根駅伝最多の優勝を誇る中大も現在のような体制ではそのうち追いつかれ追い越されることは必至だ。早急に医・科学サポートシステムを確立し対処していかなばなるまい。

出版界・白門同窓の輪

株式会社 東京堂出版

取締役・第一編集部部長

堀川 隆 (昭55・文卒/昭57・院修)

■今回は神保町の東京堂出版に堀川さんを訪ね、お話を伺いました。

一大学時代の思い出は？一

大学1, 2年は駿河台、3, 4年は多摩でした。駿河台時代には駿河台から多摩校舎まで夜通し歩いていくナイトハイイクに2回参加しました。音研の吹奏楽部に入っていましたので、その部室があった春日の方に入りびたりでしたので、そちらの思い出の方が多いですね。多摩では「マムシ注意」といった立て看板がある道を、多摩動物公園まで歩いて通ったものです。昭和31年生れの「期待される人間像」世代なのですが、4年間を通してまだロックアウトも多く、校舎の中に閉じ込められたりもしました。

一文学部、院での専攻はなんですか？一

国史学科(現在の日本史)で、大学院では日本近世史(江戸時代)でした。鎖国あたりをやっていました。

一出版の仕事は在学中からの希望でしたか？一

出版は一つの射程に入っていて、歴史系の出版社へ就職を希望していたところ、指導教授が会社を紹介してくれました。そこを経て今に至ります。第一編集部では企画・編集の仕事をしています。

一東京堂出版の歴史を教えてください一

創業は明治23年ですが、最初は書店と書籍取揃

業(取次)で、出版は翌24年からです。最初の資本は博文館から入っています。取次部門は戦後の東販につながり、出版はその時期に分離しました。一東京堂出版は辞事典の印象が強いのですが？一

辞事典の発行は900点位になります。出版が分離し最初に出したのが柳田国男の『民俗学辞典』で、それが毎日新聞出版文化賞を受け、辞典を柱にしていく方針が立ったようです。言葉の辞事典が多く、中でも語源、ことわざ、字源に関する本が多く、それらがロングで売れているのが我が社の特徴かもしれません。人間はある程度の年齢になると、自分の言語生活に目覚めるようですね。『世界の民族衣装の事典』のような、ニッチではあるが類書がなく、必ず必要としている読者がいる事典もロングテールになっています。

ここ20年位は、切り口だけで勝負しているような辞事典も増えています。

一辞事典以外ではどのようなジャンルの出版をしていますか？一

3年前くらいから一般書にも手を染めています。エッセイや趣味・実用のジャンルです。慣れないジャンルですので、最初は苦労しました。

一辞事典はネットの影響を受けていますか？一

ネットで検索すると、明らかに元本は我が社の辞事典だと思われるものも多く、悔しい思いをします。どこに、どういう風に抗議すればよいかわからず、証明が大変なものもあります。

ネットがどのくらい売上減に影響しているかは実証できませんが、限りなくグレーな要因という

気はします。図書館の予算が落ちていることなど複合的な要因も絡め、売上全体が減っていることは確かです。

一今後の課題、テーマは？一

新刊として通用するかという意味で、辞事典なんか置けないという書店流通の問題は販売上大きいですね。発行後2年経った辞典が新聞で取り上げられ、突然売れ出したこともあり、知らしめる事の重要性を痛感することが度々あります。高額本の需要が多いと思われる中国などは、これからの有望な市場だと思っていますが、権利問題がいまひとつ踏み込めない原因になっていて、興味がありません。

一今後、出版白門に期待することは？一

販売に関する話や、日頃の仕事関係で接するのはチャネルがちょっと違う情報を聞けたらと思っています。

新参者ですので、できる限り多く行事に参加し、交流を深めたいと思っています。



株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田神保町 1-17

(東京堂書店5階)

<http://www.tokyodoshuppan.com/>

告知版

■①出版白門会の新しいホームページができました。

アドレスは<http://pub-hakumon.jimdo.com/>です。GoogleやYahoo!といった検索サイトで「出版白門会」を検索すると上位にヒットしますので、そこからのアクセスも可能です。最新の活動情報などを更新していますので、是非アクセス下さい。

■②出版白門会のメインメールアドレスが出来ました。

E-mail:pub.hakumon@gmail.comです。出版白門会事務局への連絡はこちらのメールアドレスをご利用ください。

■③現在使用しています会員専用グループメール(Yahoo Groups)が4月に廃止になります。

新しいグループメールは「Google Groups」を使用いたします。移行に関しましては事務局にて作業を行います。追って皆様のメールアドレスに「出版白門会」グループメールを送信いたしますので、ご確認をお願いいたします。

■会費納入のお願い(年会費金額¥5,000)

①同封の振込用紙にて、もしくは下記口座へお振込みをお願いいたします。

郵便振替口座記号番号 00180-8-600659

加入者名 中央大学学生会出版白門会

振込用紙がなくても、直接郵便局の窓口やATMでも手続きができます。ゆうちょ銀行の口座をお持ちの方は、ゆうちょダイレクト(パソコン、携帯、スマホなど)もご利用いただけます。

②他行(銀行など)からの振込みをされる場合は下記口座をご指定のうえ、手続きして下さい。

ゆうちょ銀行 当座預金

店名(店番) 〇一九(ゼロイチキユウ)

口座番号 0600659

口座名義 チュウオウダイガクガクインカイシュツパンハクモンカイ

出版白門会は皆様の会費のみで運営しております。ご協力のほど何卒よろしくをお願いいたします。

編集後記

2月5日の電子書籍セミナーで、講師の星野氏から「出版業界ではかつては三位一体と言ったが、私は、最近では三者三様と言っている」との発言があった。確かに、今や空疎に響く「三位一体」というスローガンを振り所とした時代から、深く現実を見つめて「三者三様」の生き残る道を追求する時代に入ったのだと実感している。居心地のよかった「村」への郷愁もあるだろうが、世の中はどんどん変わっている。それに対応できた者が次の出版界を形成していくだろう。既にあちこちで胎動が始まっている。

出版白門会は、会員が出版業界に身を置きながらも、大学の同窓という縁で結ばれた会なので「三位一体」と言うより「三者三様」の立場を尊重し、懇親を深めてきた。今後その交わりの中で、東京堂出版の堀川氏がインタビューでおっしゃった「チャネルがちょっと違う情報」を面白がる会になっていけばと思う。(丹田)